大門池と敏満寺（びんまんじ）

多賀町敏満寺

大門池現況

大門池は琵琶湖東部の犬上郡多賀町敏満寺に所在する。敏満寺の地名は中世を通じて当地に繁栄した寺名に由来し、大門池の名称もこの寺の大門近くに位置したことによるといわれているが、本来は「水沼池（みぬま）」と呼ばれていた。すなわち、天平勝宝３(751)年の東大寺近江国開田図（正倉院文書）には現在の大門池の位置に水沼池が描かれている。「水沼」の音の転訛に伴って、「弥満」あるいは「敏満」と用字も変化したらしい。

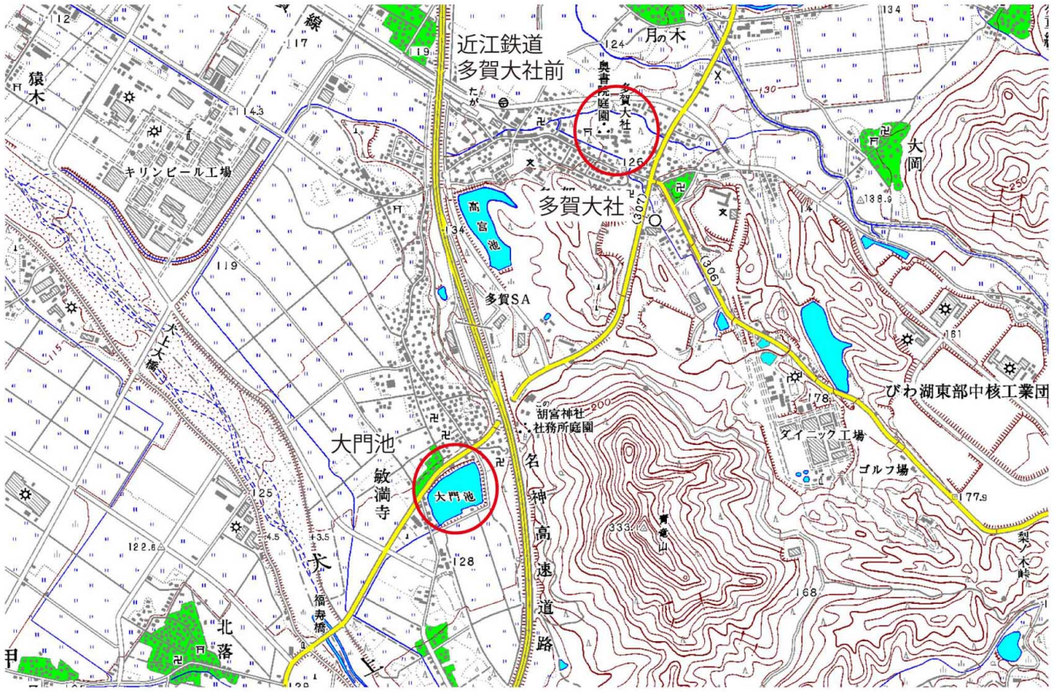
大門池こそ水沼池であり、奈良時代につくられて以降、都合1260年以上もの長きにわたって、当地の人々とともに歴史を刻んできたことが知られる。

周辺のみどころ

多賀町多賀大尼子地先の多賀大社への古参道脇に、飯盛木（いもろぎ）と呼ぶ滋賀県指定自然記念物の古木がある。元正天皇（在位715～724）の病気平癒（へいゆ）を祈願してケヤキで杓子（しゃくし）をつくり、その残り枝を地に挿したところ、大木になったと伝承される。

東側に位置する男飯盛木は幹周6.32mで樹高15m、西側に位置する女飯盛木は幹周9.75mで樹高15mを測る。男飯盛木はかつては幹が三又にわかれ（現在は一本）、女飯盛木は二又にわかれていたことから、その名が付いた。『多賀大社儀軌』に「此木に神常に降臨有りて遊び給ふと言伝えたり」と見える神木であり、多賀大社では杓子を「お多賀杓子」と称し、お守りとしてを授けている。「お多賀杓子」は「お玉杓子」や「おたまじゃくし」の名の由来とされている。

多賀大社万灯会



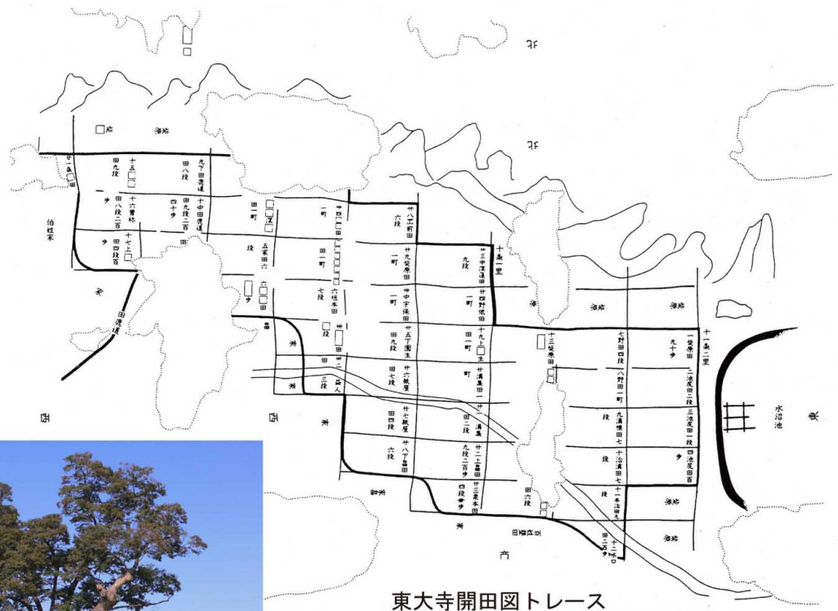
[アクセス]

●近江鉄道「多賀大社前」下車　徒歩約20分

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
（関連文献／関連施設）

●多賀町立文化財センター　TEL　0749-48-0348

滋賀県教育委員会　2011年３月発行



東大寺開田図トレース

男飯盛木

大門池

大門池と敏満寺

所在地　多賀町敏満寺

水沼村参拾町

天平勝宝３(751)年に描かれた東大寺近江国開田図（正倉院文書）によれば、「水沼村参拾町」と「覇流村七拾町」が近江国司によって開発され、太政官の命令で東大寺に施入されたことが知られる。そして平安時代には、毎年11月におこなわれる千灯会の料田にあてられていた（推定長徳４年（998）東大寺領諸国庄家田地目録）。

水沼村の開田図には、犬上郡条里十条一・二里、十一条二里の田地の様子が詳細に描かれ、同地が現在の犬上郡多賀町敏満寺付近一帯にあたることが判明する。すなわち、開田図の東端に描かれた水沼池が大門池にあたり、北西端に描かれた「田鹿道」が多賀大社への古参道である多賀町多賀大尼子付近に比定されている。水沼村は現在の小字高畑付近にあたり、中世を中心とする建物跡等が発掘調査されている。田地は三条里区画の三里にわたって36町があったことになるから、耕地は全面積のおおむね三分の一程度しかなかったことがうかがえる。また現在の敏満寺集落付近には「柴原田」といった地名注記がいくつも見られることを考慮すると、当地の開墾は思うにまかせなかったらしい。

大門池と二ノ井

敏満寺付近は主として犬上川から取水する二ノ井によって田用水をまかなってきた。猿木・多賀大尼子・敏満寺を二ノ井郷と呼ぶほどだが、一方で犬上川の水争いは熾烈をきわめたことで知られる。とりわけ大旱ばつに見舞われた昭和7年（1932）夏には、一ノ井（犬上郡甲良町金屋）付近の両岸に総勢400余人が結集して対峙し、これを230人の警官隊が鎮圧するという犬上川騒動が勃発している。当該箇所の犬上川には一ノ井から四ノ井の井堰が集中し、歴史的にみると、こうした犬上川騒動と同然の争論が頻発していたことが知られる。

現在の大門池は面積約６ha、水深約２m、貯水量９万m3を誇る。昭和20年（1945）の犬上川ダム完成以降は、主として防火用水として使用されるが、それ以前は灌漑用水の重要な水源であった。その歴史は古く、上述の開田図には水沼池に水門が朱で描かれ、また水路が藍で描かれている。そして現在もまたこの位置にメンドと呼ばれる水門があり、それからの落水は二ノ井に流れ込むようになっている。旱魃時、水沼池こと大門池は二ノ井への補給水の水源として、実に1200年ものあいだ重要な役割を果たしてきたのである。

城塞化した敏満寺

国史跡敏満寺遺跡石仏谷

甕蔵の跡

敏満寺と重源

青龍山は、標高333mの秀麗な姿を大門池の水面に映す信仰の山である。左峰山頂の磐座には、白蛇を神体とする小祠「竜宮」があり、水神信仰に彩られる。敏満寺はこの清龍山北西麓の小台上地にあったと推定され、現在は胡宮神社の境内地となっている。

ところで同社につたわる敏満寺の寺宝に、重源が建久９年（1198）に奉納した銅製の小五輪塔がある。重源は治承４年（1180）に焼失した東大寺の再建に奔走尽力したことで知られる。当時、敏満寺は平等院を介して園城寺の末寺となっていたが、水沼庄（水沼村墾田）が東大寺領であったという所縁から、同寺が重源の重要な信仰拠点となり、また交通の要衝地として勧進拠点になっていたことがうかがえる。そして国史跡敏満寺遺跡石仏谷墓跡では、重源が活躍するちょうど12世紀代に敏満寺とそれにかかわる人々の墓地が営まれはじめ、14世紀代にそのピークを迎えている。この頃、敏満寺門前は宗教都市として発展していたらしい。そして、戦国期には城塞都市化し、浅井氏や織田氏との攻防により16世紀後半代には衰退への道を歩むこととなるのである。